

萩市立図書館所蔵

諸家旧蔵書籍目録

萩市立図書館

萩市立図書館所蔵

諸家旧蔵書籍目録

萩市立図書館

一、須佐文庫（益田家）



二、須佐文庫（益田家）



三、須佐笠松文庫（益田家）



四、熊義敏印（熊谷家）



五、至誠堂（熊谷家）



六、松下杉圖書章（杉家）



七、松下村塾（杉家）



八、玉木藏書（玉木家）



九、神龜文庫（玉木家）



十、久保久清文櫃之章（久保家）



十一、馬島氏藏書印（馬島家）



十二、赤川亭藏（赤川家）



十三、小幡氏（小幡家）



十四、長藩藤姓小幡家藏（小幡家）



十五、繁澤藏書（繁澤家）



十六、明倫館印（明倫館）



藏 書 印（実物大）

序

このたび、当館の蔵書目録第四集として、諸家旧蔵書籍目録を刊行するはこびとなりました。

明治三十四年（一九〇一）開館した阿武郡立萩図書館を前身とし、さらに、山口県立萩図書館を経て現在に至るまで、歴史的風土を背景に数多くの貴重な書籍が諸家から寄贈されております。

本目録は、地元郷土史家としても著名な田中助一先生が本務の合間に、調査、分類し、ガリ版刷りで数部作っておられたのを、整理、改訂したものであります。

ここに目録刊行にさいし、格別のご高配とご指導賜りました田中助一先生に対し深謝し敬意を表するものであります。

本目録が、当館所蔵書籍を利用する際の有効な参考誌となることを心より期待する次第であります。

平成七年二月

萩市立図書館

凡 例

- 一、本目録は、当館が諸家から寄贈された書籍目録である。数多くのなかから十一家を選び作成した。
- 一、目録の配列は寄贈家別にした。
- 一、目録の記載は上段から、通し番号、書名、著者名、刊年、請求番号、冊数の順とした。
- 一、蔵書印は各家の数種類のなかから、一点ないし数点を選んだ。
- 一、郷土史料には通し番号の上に*印を冠した。
- 一、後記に諸家の目録についての解説を附した。
- 一、本書の編集校訂の実務は、萩市立図書館長近藤隆彦・司書村上杏子が担当した。

目次

序

凡例

諸家旧蔵書籍目録

一	益田家寄贈書籍	(一五〇部)	1
二	熊谷家寄贈書籍	(三三部)	12
三	杉家寄贈書籍	(三五部)	15
四	玉木家寄贈書籍	(一部)	18
五	久保家寄贈書籍	(二三部)	19
六	馬島家寄贈書籍	(六二部)	21
七	赤川家寄贈書籍	(三八部)	26
八	小幡家寄贈書籍	(一七部)	29

九	繁澤家寄贈書籍	(九部)	31
一〇	妻木家寄贈書籍	(七部)	32
一一	明倫館旧蔵書籍	(一七部)	33
	〔解説〕		35
	調査を終えて		41

諸家旧蔵書籍目録

一 益田家寄贈書籍

(書名)	(著者)	(刊年)	(請求番号)	(冊数)
一、武士訓	井沢長秀	正徳五	二甲四	二五
二、劉向說苑纂註	関嘉	寛政六	二甲五	二〇
三、四書大全			二甲五	六
四、晏氏春秋		元文元	二甲五	五
五、語孟字義(写本)	伊藤古学	宝永二	二甲五	一
六、古文尚書標註		天明三	二甲五	六
七、古文孝經考(写本)			二甲五	一
八、国語定本	秦鼎	文化六	二甲五	六
九、周易経伝		慶安元	二甲五	四
一〇、呂氏春秋		寛保三	二甲五	一〇

- 一一、大学衍義
- 一二、大学衍義補
- 一三、孝經註疏
- 一四、論語註疏
- 一五、儀禮註疏
- 一六、周禮註疏
- 一七、公羊傳註疏
- 一八、周易註疏
- 一九、穀梁傳註疏
- 二〇、毛詩註疏
- 二一、左氏傳註疏
- 二二、爾雅註疏
- 二三、禮記註疏
- 二四、尚書註疏

寬政
四

二 甲 五	二 甲 五	二 甲 五	二 甲 五	二 甲 五	二 甲 五	二 甲 五	二 甲 五	二 甲 五	二 甲 五	二 甲 五	二 甲 五	二 甲 五
二 四	二 三	二 三	二 一	二 〇	一 九	一 八	一 七	一 六	一 三	一 四	一 三	一 一
六	一 六	二	一 〇	一 六	四	四	六	一 〇	八	三	一	二 〇

五二、素書(写本)	五一、三礼義疏	五〇、三礼義疏	四九、三礼義疏	四八、欽定四經	四七、欽定四經	四六、欽定四經	四五、欽定四經	四四、春秋傍訓	四三、礼記傍訓	四二、易經傍訓	四一、詩經傍訓	四〇、書經傍訓	三九、朱子語類
	礼記義疏	儀礼義疏	周官義疏	春秋	詩經	書經	周易						

二 甲五	二 甲五	二 甲五	二 甲五	二 甲五	二 甲五	二 甲五	二 甲五	二 甲五	二 甲五	二 甲五	二 甲五	二 甲五	二 甲五
一 一九	五 二	五 一	五 〇	四 九	四 八	四 七	四 六	四 五	四 四	四 三	四 二	四 一	四 〇
一	六 九	五 〇	三 九	三 三	二 四	一 六	一 五	一	三	一	二	一	四 六

六七、隔鞞論	塩谷世弘	安政 六	三甲三(イ)	六二	一
六八、楚辞			三甲三(イ)	六三	五
六九、方正学文粹		文政二 二	三甲三(イ)	六四	四
七〇、陳龍川集要		万延 元	三甲三(イ)	六五	六
七一、詩聯大成以呂波韻		元禄二 二	三甲四	一	二
七二、古文前集			三甲四	七	三
七三、回天詩史	藤田 彪		三甲四	八	二
七四、韻府群玉			三甲四	一五	八
* 七五、藍泉集	役 興山	文化一 三	三甲四	一二	三
七六、杜律集解		万治 二	三甲四	一四	六
七七、阿淡夢物語初篇(写本)			三甲七	二	二
七八、北條五代記		万治 二	三甲七	三	〇
七九、太閤記	小瀬甫庵	慶長 三	三甲七	四	一二
八〇、慶安太平記(写本)			三甲七	五	四

九五、応仁記	寛永一〇	三甲七	一〇四	二
九六、西国太平記	寛文元	三甲七	一〇五	一〇
九七、前太平記		三甲七	一〇六	一三
九八、前前太平記	正徳五	三甲七	一〇七	一八
九九、後太平記	元禄五	三甲七	一〇八	二三
一〇〇、承久記		三甲七	一一一	二
一〇一、明德記	寛永九	三甲七	一一二	三
一〇二、本朝藤陰比事		三甲七	一一三	七
一〇三、厭蝕太平樂記(写本)		三甲七	一一四	一五
一〇四、九州記	元禄六	三甲七	一一五	二五
一〇五、見聞軍抄	寛文七	三甲七	一一六	八
一〇六、越後騒動根元記(写本)		三甲七	一一七	二
一〇七、和蘭字彙	桂川甫周 安政二	三乙三(併)	一一	一三
一〇八、字彙数求聲		三乙四	一一	四

一〇九、諧聲品字箋									
一一〇、武德編年集成(写本)	木村高敦	元和九	四甲二	一九〇	九三(四〇)				
一一一、武家嚴制録(写本)			四甲二	一九五	三一				
一二二、扶桑見聞私記(写本)			四甲二	一九六	七九				
一二三、古老物語			四甲二	一九七	六				
一二四、東鑑(新刊吾妻鏡)			四甲二	一九八	五一				
一二五、本朝武芸小伝		享保元	四乙一	五五	四				
一二六、武勇忠士伝(写本)			四乙一	五六	三				
一二七、箋註蒙求	岡白駒	寛政四	四乙四	一〇〇	三				
一二八、坤輿図識	箕作省吾	弘化二	四丙一	一四	三				
一二九、湖上石話、雲根志(前編)	木内小繁	安永二	六乙七(二)	八	六				
一二〇、湖上石話、雲根志(後編)	木内小繁	安永二	六乙七(一)	九	六				
一二一、古今軍理問答		寛文五	七乙一	五	七				
一二二、海国兵談(写本)	林子平	天明六	七乙一	一四	五				

一三三、	校刻兵要録	長沼外記	嘉永七	七乙二	一六	四
一二四、	七書直解		寛永廿	七乙二	一八	一四
一二五、	三略諺解	林道春		七乙二	一九	三
一二六、	和漢軍談	林道春		七乙二	二〇	七
一二七、	紀効新書	平山子龍	寛政一〇	七乙二	二一	六
一二八、	鈴録外書(写本)	荻生徂徠		七乙二	二二	六
一二九、	闕疑兵庫記		寛文七	七乙二	二三	二
一三〇、	握奇八陣集解(写本)		享保四	七乙二	二四	一
一三一、	残儀兵的	蘓子膽		七乙二	二五	一
一三二、	甲冑製作辦	榭原香山	寛政二三	七乙二	六〇	三
一三三、	散兵定則	安場敬明	安政五	七乙二	五三	二
一三四、	撒兵銃軌範(写本)			七乙二	五七	一
* 一三五、	築城典刑	陸軍所	元治元	七乙二	八二	五
* 一三六、	英国斯氏築城典刑	陸軍所	慶応元	七乙二	八三	五

二 熊谷家寄贈書籍

	(書名)	(著者)	(刊年)	(請求番号)	(冊数)
一、	欽定詩經伝説彙纂			二甲五	一〇五
二、	〃 書經伝説彙纂			二甲五	一〇六
三、	〃 春秋伝説彙纂			二甲五	一〇七
四、	御纂周易折中			二甲五	一〇八
五、	欽定礼記義疏			二甲五	一〇九
六、	〃 儀礼義疏			二甲五	一一〇
七、	〃 周官義疏			二甲五	一一一
八、	近思録集解			二甲五	一二二
九、	左繡			二甲五	一二六
一〇、	文選			三甲二	三五
一一、	康熙字典			三乙四	一七

二六、性靈集								
二七、唐宋詩醇					嘉永	五	三三五	一
二八、隨園詩鈔	袁簡齋						三三五	二
* 二九、陶靖節集	馬島春海			明治	一九		三三五	三
* 三〇、文章訓蒙	東崇一			明治	二一		三三六	一
* 三一、箋註蒙求校本	岡一佐々木						四三五	一
三二、宋名臣言行録輯釈	近藤元隆			文政	二		四五三	二
三三、聖代御江戸往来							八一五	二
								一
								二
								一
								一
								三
								三
								四
								三

三杉 家寄贈書籍

	(書名)	(著者)	(刊年)	(請求番号)	(冊数)
一、	家礼		元禄一〇	二甲五	一一八
二、	及門遺範		文久元	二甲五	一六〇
三、	儒門語要	倪元坦	慶応元	二甲五	一六一
* 四、	孫子評註	吉田松陰	文久三	二甲五	一七九
五、	四書松陽講義		文政一一	二甲五	二四四
六、	春秋左氏伝校本	秦鼎	明治四	二甲五	二四五
七、	点註唐宋八家文読本	川上広樹	明治一一	三甲三(イ)	八二
八、	栗山文集	柴野栗山	天保一三	三甲三(イ)	八三
九、	輿地誌略	内田正雄	明治七	四丙一	一八
一〇、	医戒(洋假)	杉田成卿		六丙一	二
一一、	紀効新書私纂		安政三	七乙二	五二

* 一二、照顔録	吉田松陰		八丁	一
* 一三、留魂録(複製)	吉田松陰		八丁	一
一四、大学衍義補(翻刻)		寛政 四		五九
一五、日本政記	頼 山陽			一三
一六、陸宣公奏儀				六
一七、名家手簡(模本)	香雪	弘化 四		二〇
一八、書編輯録纂註		文化 二一		六(五)
一九、四書朱氏本義匯叅		天保 七		四二
二〇、言行録輯釈	近藤元隆	文政 五		四(三)
* 二一、蒙求詳説	宇都宮遯庵	天和 三		四
二二、改正音訓詩経		文久 三		二
二三、改正音訓礼記		文久 三		二
二四、東雅 目録	新井君美	明治 三六		一
二五、東雅				四

二六、春嶽遺稿	松平春嶽	明治三四	四
二七、改正音訓 春秋			一
二八、近思錄			四
二九、春秋左氏伝校本	秦鼎		一五
三〇、四書纂疏			一三
三一、頭書古今和歌集遠鏡	本居宣長・山崎美成		三
三二、資治通鑒	津藩版	天保七	二九四
三三、綱鑑易知録四東奥			四甲三
三四、朱子文集			一四三
三五、書經講義		延宝二	八

四 玉木家寄贈書籍

(書名)	(著者)	(刊年)	(請求番号)	(冊数)
一、迪彝篇	会沢 安	天保一四	二甲四	五九
二、重訂小学纂註(翻刻)	福山藩版	文政 五	二甲五	一六八
三、小学句読		寛政 元	二甲五	一六九
* 四、鼈頭 近思録	宇都宮遼庵	延宝 六	二甲五	一七〇
五、四書訓蒙輯疏	会津藩版	嘉永 元	二甲五	一七一
六、大学衍義		天明 七	二甲五	二五〇
七、坤輿図識補	箕作省吾	弘化 三	四丙一	一九
八、坤輿図識	箕作省吾		四丙一	二二
九、七書(七書正文)		寛政 七	七乙一	二八
一〇、豈好辯	会沢正志齋	安政 六	八丁	六二
一一、三事忠告	張 養活		八丁	六三

五 久保家寄贈書籍

(書名)	(著者)	(刊年)	(請求番号)	(冊数)
* 一、六諭衍義大義	萩藩本	弘化 四	二甲四	五七
* 二、臣行解	萩藩本	文化一〇	二甲四	五八
三、詩經集註		寛政 四	二甲五	一六二
四、旁訳四書		文化 三	二甲五	一六三
五、旁訳小学		文化 三	二甲五	一六四
六、書經集註			二甲五	二四七
七、四書大全		慶安 四	二甲五	二四八
八、唐宋八大家文格		文久 三	三甲三(イ)	八八
九、慶安太平記(写本)			三甲七	一六四
一〇、開城逸史(写本)			四甲二	一三一
一一、肥後物語(写本)			四甲二	一三三

一二、日本王代一覽									
一三、日本外史	賴山陽					四甲二	二三三		七
一四、貞丈雜記	伊勢貞丈	弘化三				四甲二	二七二		二〇
一五、孫子副詮	佐藤一齋	天保二三				五戊	一一		一五
一六、增補校正武用辨略	木下義俊	文化一〇				七乙一	一七		二
一七、兵要錄(写本)	長沼澹齋					七乙一	二六		五
一八、海国兵談(写本)	林子平					七乙一	二七		〇
一九、七書直解						七乙一	三一		四
二〇、歐陽詢模楷千字文		延享四				七乙一	三二		一三
二一、告志篇、左嘉国政記(写本)						七丙(句)	一一		二
二二、故事談(写本)						八丁	五九		一
二三、古今倭歌集(写本)						八丁	六一		一

六 馬島家寄贈書籍

(書名)	(著者)	(刊年)	(請求番号)	(冊数)
一、新著聞集		寛延 二	〇四三	四一
二、閑聖漫録	会沢正志齋	文久 三	〇四三	四二
三、見聞録(写本)		〇七〇	一一	一一
四、下村上書(写本)		〇七〇	一二	一一
* 五、三策	狩野深臧・松下村塾版	明治 二	〇七〇	一五
* 六、甫仙叢書(原稿)	馬島甫仙		〇七〇	三六
* 七、周防府松崎天神鎮座考	弘 正方	嘉永 二	〇七一	一
* 八、事斯語	毛利齊広	天保二三	〇七一	六
* 九、臣行解	山県半七	文化二〇	〇七一	七
* 一〇、佛法護国論	月性	安政 三	〇七一	八
* 一一、俟采擇録	久坂玄瑞		〇七四	三一

一二、御預人旧記書拔(写本)	蓮了	元治元	〇七四	三二	一
一三、天神記図会			一二五	二	五
一四、古文考経正文		明治一五	一八四	六	一
一五、増補考経彙註		天保六	一八四	七	三
一六、呂氏童蒙訓			一八五	一	一
一七、言志晚録	佐藤一齋	嘉永三	一八七	三	二
一八、下学邇言	会沢正志齋		一八七	四	三
一九、弘道館述義	藤田東湖	慶応二	二〇三	七	二
二〇、退食聞話	会沢正志齋	天保一三	二〇三	一四	一
二一、学語(写本)	塚田多門	寛政六	二八三	一	一
二二、玉鉾百首解	本居宣長		三二六	一〇	二
二三、靖献遺言講義		慶応三	三三〇	二	二
二四、唐宋八大家類選			三三四	三	一〇
二五、詩韻碎金・幼学便覧		嘉永二	三三五	七	一

四〇、宗忠簡文鈔			文久元	三三六	一〇	二
四一、歷代名家文鈔	中尾正緒	慶応二	三三六	一一	三	
四二、宋李肝江文抄(翻刻)		慶応二	三三六	一二	三	
四三、謝疊山文鈔			三三六	一三	二	
四四、文丈山文抄		万延元	三三六	一四	三	
四五、山陽先生題跋	児玉慎		三三六	一五	一	
四六、元寇紀略	大橋訥庵	嘉永六	四一四	一六	二	
四七、意見書(写本)		(明治)	四一六	一五	一	
四八、讀史論略詳注	石坂竿齋	文政八	四二〇	一	一	
* 四九、宋元明鑑紀奉使抄	吉田松陰	明治二	四二〇	四	二	
五〇、赤城二十七士伝	珮 弦齋	嘉永三	四五二	二五	二	
五一、三忠伝	安東省庵	貞享元	四五二	二六	二	
五二、東宮勸読録	楊 誠齋	慶応四	五一九	三〇	二	
五三、皇朝政要、忠興鑑言	三宅勸瀾		五三五	一	一	

五四、植蒲談(写本)	海保青陵					五三五	三	一
五五、滑川談(写本)	塚田多門					五三五	四	一
五六、太平策(写本)	荻生徂徠					五三五	六	二
五七、漫費紙録	河野中庵				天保	六八〇	一	一
五八、七書正文					慶応	七九一	一	三
五九、魏武註孫子	岡 白駒				宝曆	七九一	二	一
* 六〇、孫子評註	吉田松陰				文久	七九一	四	二
六一、王陽明先生詩鈔	塚原苔園				明治	九二一	一	二
六二、碧城絶句	陳 文述				文久	九二一	一	一
					元		三	

七 赤川家寄贈書籍

	(書名)	(著者)	(刊年)	(請求番号)	(冊数)
一、	未賀能比連			一乙	一
二、	瀛環志略	徐 繼畬	文久元	四丙一	一〇
三、	天文図解	井口常範		六乙四	一
四、	病学通論	緒方洪庵	嘉永二	六丙一	三
五、	経方權量略説	喜多村直寛	嘉永七	六丙一	一
六、	砲疾論	佐藤尚中		六丙一	二
* 七、	竈氏原病論	福田正二	明治七	六丙一	二
八、	瘍科秘録	本間棗軒	弘化四	六丙二	二
九、	続瘍科秘録	本間棗軒	安政六	六丙二	五
一〇、	蔓難録	柘 彰常	文化二	六丙二	五
一一、	医法新話	南木龍江	享和三	六丙二	二

一一、病名彙解	桂州	貞享三	六丙二	九	七
一二、引痘新法全書		弘化四	六丙二	一一	二
一三、揣腹叢說(写本)			六丙二	一一	二
一四、傷寒論剖記	喜多村直寛		六丙二	一二	一
一五、傷寒六經析義		文久元	六丙二	一四	三
一六、金匱要略疏義		享保八	六丙二	一五	三
一七、痧脹玉衡	小島瑣	享和八	六丙二	一六	二
一八、瘧疫論標註	黒弘樹庵	明治三	六丙二	一七	一
一九、医療手引草	山脇東洋	宝曆八	六丙二	二〇	二
二〇、藏志	島村鼎甫	明治六	六丙五	二	二
二一、生理發蒙	横井信之	文久二	六丙五	二	三
二二、七新藥	司馬凌海	明治五	六丙五	九	二
二三、理礼氏薬物学	小林義直				

二六、袖珍藥說	桑田衡平	明治三	六丙五	一〇	五
二七、内科集成	小関三英		六丙八	二	三
二八、内服同功	杉生方策		六丙八	三	二
二九、増補重訂西説内科撰要	宇田川玄隨	文政九	六丙八	四	七
三〇、濟生三方	杉田成卿	文久元	六丙八	五	三
三一、眼科約説	小山内元洋	明治五	六丙一一	三	三
三二、併澁百金方摘要		嘉永六	七乙一	一〇	四
三三、野砲演習式	杉田成卿	安政五	七乙二	八一	一
三四、泰西三才正蒙	永井士訓	嘉永三	八甲	二四	三
三五、博物志		天和三	八甲	四一	四
* 三六、技癢録	南部伯民	文化元	八丙	五七	二
三七、隔鞞論	塩谷世弘	安政六	八丁	一三六	一
三八、物理階梯		明治七			三

八 小幡家寄贈書籍

(書名)	(著者)	(刊年)	(請求番号)	(冊数)
一、 郭注莊子	服部南郭	元文 四	二甲五	一〇
二、 柳宮綱政(写本)			四甲二	二五二
三、 武家勸懲記(写本)			四甲二	三六七
四、 武陽禁談(写本)			四甲二	二六九
五、 武林隱見録(写本)			四甲二	二七一
六、 唐船(写本)			四甲二	二七四
七、 古今武家禁録(写本)			四甲二	三九一
八、 家忠日記(写本)			四甲二	三九二
九、 本朝武芸小伝			四乙二	八一
一〇、 近世畸人伝		文化 三	四乙二	八八
一一、 柳宮尊胤録(写本)			四乙三	一四

- * 一二、 八家略系譜(桂・志道・口羽等、写本)
- * 一三、 御略系図(毛利家関係諸家、写本)
- 一四、 御武具覚書(写本)
- 一五、 砲兵要務教程
- 一六、 甘雨亭叢書
- * 一七、 小幡家藏書目録(写本)

八庚	八乙	七乙二	七乙二	四乙三	四乙三
三二	一八	六〇	八	三七	三五
一	四〇	二	五	一	一

九 繁澤家寄贈書籍

(書名)	(著者)	(刊年)	(請求番号)	(冊数)
一、 鄙言(写本)			二乙六	一一一
二、 漢魏詩集		寛延元	三甲四	一三七
三、 東藻会彙			三乙三(イ)	一六
四、 用字格			三乙三(イ)	一七
五、 金壺字考(写本)			三乙三(イ)	二〇
* 六、 長州家年表(写本)			四甲二	四二五
七、 斥非(写本)	紫芝主人		八丙	七三
* 八、 雲陣茶話、崇文公附録(写本)			八丙	七四
* 九、 長門国萩明倫館書庫目録(写本)			八庚	二九

一〇 妻木家寄贈書籍

(書名)	(著者)	(刊年)	(請求番号)	(冊数)
一、 読史論略(写本)			四二〇	九
二、 武教全書(写本)	山鹿素行		七九一	六
三、 兵要録、甲号(写本)	長沼澹齋		七九一	七
四、 兵要録、乙号(写本)	長沼澹齋		七九一	八
五、 握奇八陣集解(写本)	長沼澹齋	享保 四	七九一	一〇
六、 師律提綱(写本)	大原陳瑤		七九一	一
七、 日置流射学書(写本)			七九三	一

一一 明倫館旧蔵書籍（和漢書の部）

	（書名）	（著者）	（刊年）	（請求番号）	（冊数）
一、	徂徠集集話（写本）			三甲二	一五
二、	資治通鑑綱目全書			四甲三	六
三、	瀛環志略			四丙一	一〇
四、	鶴林玉露（翻刻）		寛文二	〇九三	九
五、	文體明辯 第一卷		万曆八	〇九三	一
六、	古今人物論 第一九卷			〇九四	一
七、	諸国名義考	斎藤彦磨	文化六	〇九四	二
八、	* 三兵答古知幾（九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五）	大村益次郎		〇九七	七
九、	夜航詩話	津坂東陽	天保七	三三五	六
一〇、	資治通鑑綱目（卷下、三上、三下）			四二〇	三
一一、	康熙字典			一一三の二	

一二、尺本堂綱鑑易知錄(卷九)

一三、烈祖成績(三、一五)

一四、氣海觀瀾広義

川本幸民

一五、王事忠告

安政 三
嘉永 五

一六、資治通鑑 一一―一四八

一七、謡曲晝誌 卷之二

〔解説〕

一 益田家寄贈書籍（益田精祥氏）

益田精祥アキヨシは長州藩の永代家老長門国阿武郡須佐邑主であった益田右衛門介親施の長男で、幼名を精治郎といった。父の死後慶応元年三月十四日に家督を相続したが、数え年四歳であったので、藩命により親施の末の妹忠子の夫桂宇右衛門親澄（一門家老吉敷邑主毛利藏主房謙の九男）が益田親祥と改めて家政を見た。精治郎は成長して精祥と改め、華族に列せられて男爵となり、大正六年八月二十五日に五十六歳で逝去した。

目録の書籍は明治三十四年一月三十日に阿武郡立萩図書館が創立せられた際、開館当日と同年七月八日の二度に渡り納入せられている。百五十一部の中蔵書印の捺していない本が二十一部あるが、それ以外の本には「兎紋」・「須佐文庫」・「須佐笠松文庫」・「育英館蔵書」・「育英武場之印」・「長門国阿武郡須佐村笠松益田氏蔵書」（以上朱字印）、「育英館蔵書」・「益親施印」（以上白字印）等が一個又は二個、三個捺してある。この外「楊井家藏」と「周防国明倫館図書印」（以上朱字印）や「小倉氏」（朱字印）等の蔵書印が捺してある本が各一部ある。前者は「群書拾唾」（一四三）、後者は「周南先生文集」（六六）である。なお「益親施印」の捺してある本も「陳龍川集要」（七〇）一部だけである。

特に私の興味をひく本は一〇七「和蘭字彙」（全十三冊）で、最新刊の蘭和辞書を益田親施が購入していたことである。

二 熊谷家寄贈書籍（熊谷萬吉氏）

熊谷萬吉クニヤは長州藩御用商人熊谷五右衛門義敏の一子として萩今魚店に生れた。万延元年七月十四日父義敏が急逝した時未だ幼かったので、藩命によって小林三四郎が中継養子となった。成長して家をつぎ萩町会議員・山口県会議員となって地方自治や社会公共のためにつくしたほか、茶道（表千家碌々齋の直門）や歌道（楳崎芦翁の門人）に堪能であり、熊毛郡曾根村で塩田を経営、大正十二年九月二十日に六十八歳で逝去した。

目録の書籍のうち、一―一二は明治三十四年一月三十日萩図書館の開館当日寄贈せられたものである。大部分蔵書印は捺していないが、「至誠堂」・「〇誠齋」・「熊義敏印」（以上朱字印）等が捺してあるものがある。現在山口県立萩高等学校に保管せられている蘭書シヨメール家事百科辞書等もそ

の時一緒に寄贈せられたものである。

一三―三三は熊谷家の本家である東京高等師範学校教授(教育学)文学士熊谷五郎の旧蔵本であったもので、「熊谷蔵書」・「尚古齋所蔵」・「静勝館蔵」・「矢野蔵書」(以上朱字印)等の捺してあるものがある。五郎は大正七年十月十七日に五十歳で逝去した。「大教育学」や「教育学」等の著書があり、蔵書はほとんど東京大学に寄贈せられたそうである。(熊谷敦義氏談)

三杉 家寄贈書籍(杉 民治氏)

杉民治は萩藩士杉百合之助常道の長男で、名は修道、通称ははじめ梅太郎といったが、民政につくした功により藩主毛利敬親より民治の名を賜った。吉田松陰はその弟である。廢藩後松下村塾を存続し、明治四十三年十二月一日八十三歳で逝去した。

目録の書籍は主として明治三十五年三月十八日萩図書館に寄贈せられているが、同年十一月二十四日に寄贈せられたものもある。一四―三三は未整理のまゝであるので、後に寄贈せられたものと思われる。

杉家の旧蔵書には無印のものもあるが、多くは「松下村塾圖書章」・「松下村塾」・「杉氏釣蔵」・「松本杉氏」(以上朱字印)が一個又は二個捺してある。未整理本には「吉田氏家書之印信」(朱字印)や「吉田氏蔵書」(朱字印、白字印の二種)が捺してある。

二六「春嶽遺稿」は民治が三十五年三月四日杉孫七郎から贈られたものであり、二九「春秋左氏伝校本」は民治の長男で松陰の後嗣となった吉田小太郎(明治九年萩の乱に参加して十九歳で戦死した)の所持していた本である。

七「点註唐宋八家文読本」(全十六冊の中六巻欠本)は、松陰の門人山口川彌二郎から贈られた本である。

四 玉木家寄贈書籍(玉木文之進氏)

玉木文之進は萩藩士杉七兵衛常徳の三男で、大組士玉木家の養子となり、天保十三年松下村塾をはじめ、甥の吉田松陰を薫陶した。明治九年十一月六日萩の乱の責任を感じて切腹した。行年六十七。養子正誼は乃木希典の弟で、同年十一月一日萩の乱に参加して戦死した。行年二十三。正誼の遺児正之は成長して陸軍中佐となり、昭和二十九年二月十一日に七十八歳で逝去した。正之は通称を文之進と言ったので、この寄贈者の文之進は正之であ

る。

しかし目録の書籍は杉家と同じ三十五年三月十八日に萩図書館に寄贈せられているので、杉民治により一緒に納入せられたものと思われる。無印の本もあるが、「玉木藏書」・「神亀文庫」・「龍峰之印」(以上朱字印)等の捺してあるものがある。

一「迪彝篇」の後見返しには「松下村塾図書」と書き入れがしてある。

五 久保家寄贈書籍 (久保幾次郎氏)

久保幾次郎は萩藩士久保五郎左衛門久成の二男で、兄久保清太郎(断三)久清の養子となった。久成は早く隠退して家督を久清にゆずり、松本新道の家で附近の子弟を教えた。玉木文之進のはじめた松下村塾の名を受けつぎ、のちに吉田松陰にゆずった。松陰の養母吉田クマは久成の義妹である。久清は松陰に兄事して国事に活躍し、廃藩後は山口県權代参事・名東県權令・度会県令等をつとめ、明治十一年十月二日東京で逝去した。行年四十七。

目録の書籍は杉・玉木両家と同じく明治三十五年三月十八日萩図書館に寄贈せられているので、杉家か玉木家にあずけてあったのではないかと思われる。無印の本もあるが、大部分には「久保久清文櫃之章」・「中島藏書」・「尾関」(以上朱字印)や「重陽園」(白字印)などが捺してある。

二一「告志篇、佐嘉国政記」と二二「故事談」の二部は久保久成の手写本である。二三「古今倭歌集」も久成の手写本であるが、この本は河野道氏カサノミチウヂの寄贈本であり、便宜上ここに一緒に記載したものである。

久成の遺墨は稀であり、殊に久保家所蔵の資料が戦災のためなくなった今日、萩市立図書館に保存せられていることは欣幸に堪えない。

幾次郎は農商務省鉱山局に勤めたが、早く退官して牛込区天神町に住み、大正九年八月に逝去した。

六 馬島家寄贈書籍 (馬島春二氏)

吉田松陰の愛弟子であり、松陰の死後松下村塾の指導者となった馬島甫仙は、萩藩医馬島宗仙光政(眼科、明治八年八月二十六日歿、行年五十六)の嫡子で、名は光明のち光昭、通称は甫仙のち誠一郎、号を櫻山または樗櫟といった。しかし家をつがぬうちに父に先立ち明治四年十二月二日に二十

八歳で急逝したので、宗仙のあとには妹ツルの婿忠四郎が家をついだ。忠四郎は大正八年二月一日六十六歳で逝去し、長男敏章が家をついだ。大正十四年十月十二日に四十一歳で死去、子がなかった。忠四郎の三男春三が家をついだ。

春三は大正十五年十一月台湾に渡り、昭和二十一年四月帰国して丸亀市に住み、四十五年九月二十三日に六十四歳で逝去した。

馬島家はもと松本船津にあったが、のちに土原山^{ヒラヤマ}中町に転居した。

目録の書籍は大正十五年二月四日萩図書館に寄贈せられているが、そのうちの十四部には捺印はなく、四十八部には次の印章が一〜三個捺してある。

馬島氏藏書印（朱字印） 十八部

馬島光昭（白字印） 三部

櫻山愷史（朱字印） 三部

大森藏書（朱字印） 十七部

長門大森図書（朱字印） 十二部

黒瀬之章（朱字印） 一部

口磨園藏書（黒印） 一部

「馬島光昭」と「櫻山愷史」の両印の捺してあるのは二八「晩唐詩選」・三九「謝選拾遺」・四一「歴代名家文鈔」の三部である。そして「謝選拾遺」には自筆で「謝選拾遺全部江月齋久坂老兄監別贈予宜珍重也 壬戌三月馬島光明誌」と後書が書いてある。即ちこの本は、文久二年三月に甫仙が松下村塾の先輩久坂玄端より送別に貰った記念品である。

一七「言志晩録」には包装紙に「櫻山狂夫所藏」と書いてあり、その外「松下 馬島生所藏」・「松下 馬島藏書」・「松下 馬島図書」・「長門馬島光明」等の書入本がある。

大森藏書には「山中丁大森」・「大森勝央藏」・「大森龜三郎藏」・「松下大森生所持」等の書入れがある。「口磨園藏書」には江木直方と書いてある。

六「甫仙叢書」は安藤紀一が甫仙の原稿を整理し、序文を記し、昭和三年十二月二十三日萩図書館に寄贈したものであるが、便宜上ここに入れた。

七 赤川家寄贈書籍（赤川慥介氏）

赤川慥介（つひ）は萩藩医赤川玄悦恒俊（食録四十七石五斗、明治二十三年九月二十日歿、行年八十三）の子で、名を忠郷、通称を敬三（げいさん）、号を石翁、友月・恥庵といった。はじめ医学を学んだが、幕末に際して志士として活躍し、膺徴隊総督になった。維新後福岡県大書記官・青森県大書記官・秋田県令等を歴任し、退官後は官幣大社広田神社宮司となる、大正十年一月二十日神戸市で逝去した。行年七十九。

目録の書籍は明治四十年八月十五日に萩図書館に寄贈せられているので、恐らく帰萩して江向にあった家を整理したものと思われる。無印のものもあるが、「赤川亭藏」・「赤川藏書」・「字玄襟」・「旭亭」・「無芳園」・「薔薇園主人」・「二十六区医学社印」（以上朱字印）が一個または二個捺してある。

二十六区医学社は、明治八年九月十五日萩付近の第二十六区の医師が加入して設立した団体で、現在の萩市医師会の前身であるが、赤川玄悦が創立以後数年間社長をつとめたので、同社の解散後その蔵書の一部が赤川家に残ったものと思われる。蔵書印の捺してあるのは、二二「生理發蒙」と三一「眼科約説」の二部だけである。

二二「藏志」（二巻）は宝曆四年（一七五四）に京都の医官山脇尚徳（号東洋）が行った我国最初の人体解剖の報告書で、日本医学史上の貴重な本であり、東洋の愛弟子であった萩藩医栗山孝庵献臣は、刊行に先立って一部を贈られ、それに感激して萩で第二回目の解剖を行ったのである。

八 小幡家寄贈書籍

目録の書籍は明治四十一年九月二十七日萩図書館に寄贈せられているが、一七「小幡家蔵書目録」以外は、「小幡」・「小幡氏」・「小幡藤遠継」・「藤原姓黨定継」・「武威国兒玉黨小幡」・「藤姓小幡藏書」・「藤原政宣」（以上朱字印）が一個または二個捺してある。

旧萩藩士小幡高政は大組士で食録四百六十石、通称彦七、のち図書と改め、井山と号し、詩書・画を能くし、茶道を嗜んだ。幕末藩の要職を歴任し、維新後小倉県權令をつとめ、退官後萩に帰り夏橙の栽培を奨励し、百十銀行頭取となり、明治三十九年七月二十七日に九十歳で逝去した。

一五「砲兵要務教程」は明治四十年四月十八日に高政の女婿小沢清晴の寄贈したものであるが、「藤姓小幡藏書」の印が捺してあるので一緒に記載

した。

九 繁澤家寄贈書籍（繁澤寅之助氏）

繁澤寅之助は萩藩儒繁澤光太郎の弟忠藏（儒者）の子であるが、光太郎のあとをつぎ、萩警察署・萩町会議員・阿武郡会議員等をつとめ、堀内に住み、昭和五年七月十四日に逝去した。

無印の本もあるが、大部分には「繁澤蔵書」（朱字）印が捺してあり、五「金壺字考」には「上領家藏」（朱字）の印も捺してあるが、これは同家の先祖である繁澤豊城（明倫館六代学頭）が長府藩医上領伯仙の子であるから、豊城の持参したものと思われる。

一「鄙言」の巻末には「山県半七筆記」と書き入れがあるので、明倫館十代学頭山県太華の写本と思われる。

一〇 妻木家寄贈書籍（妻木栗造氏）

妻木家は萩藩の大組士で食禄百六十石、彌次郎忠順（文久三年七月十四日歿、行年三十九）とその子寿之進忠篤は共に吉田松陰の門人であった。寿之進は明倫館都講をつとめ、維新後名を狷介と改め、岡山県書記官となり、明治二十三年九月二十六日に四十五歳で逝去した。

栗造は狷介の長男で、東京帝国大学を卒業し、三菱炭鋼の長崎鋼業所々長をつとめ、昭和二十八年一月十五日に八十三歳で逝去した。

一一 明倫館旧蔵書籍（和漢書の部）

目録のうち「明倫館印」（朱字）の捺してある本は、一、三、四、五、六、七、八、一〇、一一、一二、一三、一四、「周防国明倫館図書印」（朱字）の捺してあるのは一五、一六、「長門文庫図書」（朱字）の捺してあるのは二、九、「長藩書庫」（朱字）の捺してあるのは一七であり、一には「山口県萩中学校」（朱字）、三には「巴城学蔵書印」（朱字）、九には「勝木蔵書」（朱字）、一二には「梓事局印」（朱字）、一四には「博習堂印」（朱字）も捺してある。

調査を終えて

萩市立図書館は昭和四十九年九月二十六日に開館せられたものであるが、その源は明治三十四年一月三十日に、山口県立萩中学校の構内に創立せられた阿武郡立図書館である。

この図書館は山口県最初のものであり、また全国最初の郡立図書館でもあったが、大正十二年四月一日郡治の廃止によって県立となった。

終戦後萩市の戦後対策審議会の答申に基づき、市内の図書館を中央に移轉合併することになり、江向の萩市公民館の東隣に新築開館し、明倫図書館他の市立図書館を合併、更に萩市役所の改築に伴い、現在地に新築移轉することになって、県より市へ移管せられたのである。

このような変遷をへた関係で、蔵書は多様であり、殊に創立当初より名家・旧家等からの寄贈本が多く、その中には先賢の手沢本や、稀覯本や貴重本も含まれている。

私は昭和三十三年五月十一日に、県立萩高等学校で田中誠教諭の御協力を得て、永年探しもとめていた熊谷（クマヤ）家旧蔵の和蘭書シヨメールの家事百科辞書の初版一冊（上巻だけ）と、再版十六冊（全巻揃）とを確認した時、これが郡立萩図書館開館に際して熊谷萬吉氏から寄贈せられたものであることを知った。

そして萬吉氏の子息の敦義氏から『萩図書館ができた時、父は相当多くの本を寄贈しましたが、それがどんな本か知りたと思いますので、機会があったらしらべて見て下さい』といわれた。しかし萩図書館には寄贈者別の目録や控帳等は作ってなく、それぞれの本に氏名や年月日等が記載してあるだけであるから、容易にはわからなかった。

その後四十八年八月二十五日、六両日私が大会会長として、日本英学史学会第十回研究大会を萩市で開催したあと、萩図書館で見た桂川甫周著の「和蘭字彙」が益田精祥男爵の寄贈本であることを知った。実は去る三十八、九年に須佐の益田家所蔵の古書や古文書の調査をした時、予想に反して蔵書が少ないことを不思議に思ったことがあるので、同家の旧蔵本も萩図書館に入っているのではないかと思ひ、長嶺司書に聞いて見たところ、『大分あります』とのことであった。

四十九年萩市立図書館の発足に際して、私も図書館協議会委員を委嘱せられたので、この際蔵書を一通り見て置きたいと思ひ、黒川館長の賛成を得て実行することとした。

例年夏休中は診療時間を午後三時までとしているので、その後五時の閉館までの時間と、日曜日の午前に行った。そして先づ和漢書の寄贈者及び旧蔵者を一通り調査したので、その第一回を整理して目録を作り、プリントして御覧いただく次第である。

この研究は今後も継続したいと思っているので、御気付きの点があったら御教示いただきたい。

終りに種々御協力いただいた黒川純行館長をはじめ、中村杏子・長嶺陽子・米原祥三諸氏に深謝致します。

昭和五十年十一月二十三日

編者 田中助一

萩市立図書館所蔵
諸家旧蔵書籍目録

平成7年3月

編集発行 萩市立図書館
萩市江向552-2

印刷 桜プリント企業組合

